広島大学蔵福尾文庫『善正太子物語』（阿弥陀の本地）天文七年写本　翻刻

広島大学日本語史研究会

一、広島大学蔵福尾文庫『善正太子物語』について

広島大学中央図書館貴重資料室に、広島大学名誉教授故福尾猛市郎氏旧蔵の福尾文庫が有る。この福尾文庫の全体は、位藤邦生編『広島大学蔵古代中世文学貴重資料集　翻刻と目録』（二〇〇四年、笠間書院）所収の「福尾文庫目録」で知ることができる。

ここに翻刻する『善正太子物語』は、福尾文庫第三十一号、天文七年（一五三八）の写本である。表紙・外題・内題・尾題すべて存しないため、書名不明である。今は、「福尾文庫目録」に従い、『善正太子物語』と呼ぶ。

本『善正太子物語』は、阿弥陀の本地・法蔵比丘・弥陀の本懐・天竺の物語などと呼称される説話の一本である。伝本は多く（国文学研究資料館データベース「日本古典籍総合目録」、参照）、諸本間の異同が甚だしい。諸本は、以下の文献で読むことができる。

松本隆信編『影印室町物語集成　第五輯』（一九七三年、汲古書院）。横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第一・第十二・補遺一（一九七三・一九八四・一九八七年、角川書店）。横山重『古浄瑠璃正本集　第10』（一九八二年、角川書店）。松本隆信『中世における本地物の研究』（一九九六年、汲古書院）。『七寺古逸經典研究叢書　第四巻　中國日本撰述經典（其之四）・漢譯經典』（一九九九年、大東出版社）。黒田佳世「『阿弥陀の本地』解題・翻刻　―仏教文化研究所所蔵本と慈願寺蔵本」（同朋大学仏教文化研究所紀要」20、二〇〇一年三月）。

この善正太子物語は、「阿弥陀の本地」または「法蔵比丘」として、奈良絵本にもされ、広く読まれた。その一本の全文を、慶應義塾大学「世界のデジタル　奈良絵本データベース」で閲覧可能である。

また、「阿弥陀の本地」と『今昔物語集』『往因類聚抄』『大乗毘沙門経』との関係も指摘されている（今野達「今昔物語集巻五第廿二話伝承の展開　1・2」〈『国語』第五巻一号・二号、三号・四号。一九五七年四月、七月〉、『今野達説話文学論集』〈二〇〇八年、勉誠出版〉に所収。徳田和夫『お伽草子研究』〈一九八八年、三弥井書店〉。本田義憲「解説　「辺境」説話の説」〈『新潮日本古典集成　今昔物語集本朝世俗部　二』一九七九年、新潮社〉。

本福尾文庫本本文では、善正太子の生国が西上国（西城国）・夫人の生国が東上国（東城国）、太子が城を出てすぐに、太子の母は嘆き

のあまり亡くなり、西上国に到着した太子が宿で笛を吹く。松本隆信の分類では、乙類（B類）本に当たる。

右の参考文献で知られる乙類諸本中、福尾文庫蔵『善正太子物語』は、現存最古の写本である。

しかし、「福尾文庫目録」に掲載されるのみで、これまで、「阿弥陀の本地」の一本として、本書が紹介されたことは無かった。

このような現状に鑑み、広島大学日本語史研究会は、本資料の輪読を進めてきた。

本資料の書誌・諸本・成立・内容等は、すべて右の諸文献の記述に譲り、学界における今後の研究のため、ここに本資料の翻刻を公にする次第である。

大方のご批正を願いたい。

（以上、佐々木　勇　記）

二、翻　刻

〈凡例〉

一、本翻刻は、広島大学蔵福尾文庫『善正太子物語』原本に基づき、その全体を、現行の字体に改めたものである。

一、翻刻にあたり、全行に、原本に対応する通し番号を付した。

一、原本の配行・字詰を保ち、仮名遣いも底本のままとした。振り仮名も、片仮名または平仮名で、原本の通り翻字した。

一、原本には、○印の区切り点が存する。本行右・中央・左に加点されるが、その位置を定めがたいものが含まれるため、翻字では、・で統一した。

一、原本は、∞で濁音を標示している。この符号は、声調を標示していないため、一様に（濁）とした。

この濁点には、「しゆ（濁）」「きやう（濁）」「ちう（濁）」の如き加点が存する。これらは、「しゅ」「きやう」「ちう」を一まとまりとして捉え、その全体に濁点を加点したものと考えられる。

一、その他、翻字に際し、注が必要と思われる点は、当該箇所に、［　］に入れて記した。

一、本翻刻は、佐々木勇・刀田絵美子・河野里沙・中塚恵理・遠城千晶・井浪真吾・釋就実・児玉奈月・岡本絵里・高尾千尋で作成した。

一、原本閲覧・写真撮影ならびに翻刻の許可を賜わった、広島大学図書館に対し、心中より御礼申しあげる。

1　抑（ソモ）〳〵三千世界（サンセンセカイ）に事さま〳〵おほけれ共あはれ
2　のすへのめてたきはたんせんのほうの御すまひ
3　なり 然（シカルニ）に胡（コ）國に并三万七千六百國その内に
4　さいしやう國ありあるしをは月さう天輪聖王（テンリンショウワウ）
5　と申・きさきをは・浄王（シヤウワウ）ふにんとてそ・申たて
6　まつりける・けんわうにてましませは并の國
7　まて・あふき奉（タテマツル）る事かきりなし・一人の
8　王子（ワウシ）ましまし御名をは善正太子（センシヤウタイシ）とそ・申
9　ける十六歳（サイ）にならせ給ふまて后（キサキ）も・そな
10　わりたまはす并（ノ）國をたつねさせ給へ共きさき
11　に・ならせ給ふへき・美（ヒ）（濁）人（シン）（濁）もなし爰（コヽ）に東上國

のあるし善見王と申きさきをはあさうき
の宮とそ申ける・ひめみや一人おはしけるか
三國一番の美人にておはしますよしを
風のたよりに善正太子きこしめしおよ
はれ・うわのそらなる・戀風を御身にうけ
させ給ひて・御心も・うかれけるに公卿天上人
をちかつけ是より東上國への道ののりはい
かほとありけるそと御たつねありけれは地下人
こたへて申やうおよそ東上國への道は三年
三月とは申せとも所ゝになんしよありて人
けんのかやう事まれなれは璇そんせさる由
を申上太子きこしめしてたとひ五年十年
に行道なりとも此地に・つ、・かは・いかてか・ゆき
つかて・あるへきと・おほしめしそれをはよく
こそ・した、めたまひけれある夕暮に大
裏をしのひ出させ給ひて・東のそらを・御
心あてにて・たとろ〳〵とあゆませ給ふさるほとに
大裏にはしんなううせさせ給ひぬとて・大王
きさきを・はしめとして公卿〔潤〕天上人百くわん
けいしやうにいたるまて此御事をなけかぬ人も
なかりけりさて太子は一人まよひゆかせ給ふ
ほとに・六やをんにさしか、り給ふ此野を・見
わたし・たまへは道もなく雲よりほかははても
なしあきれて・た、せ給ふ處に歳のよわひ・
八十はかりのおきなかうへには雪をいた、き
こしにはあつさのゆみをはりはとのつへにす
かり立たりしか太子をつく〳〵と・見たてま
つり此墅は人間のかよわさる處なり・こらう
やかん・のすみかへ・か、るいふなる御すかたとして
只一人きたらせ給ふはふしんにこそ候へと申上る
太子とりあへす・おほせけるは我は是西上國
のあるし天輪聖王の御子善正太子とは
なんちか事なり・はつかしなから事の子細を
かたるへし・東上國の大王の姫宮あしゆくふ
にんと申を風のたよりに・き、しより戀の
おもひにあくかれ・是まてまよひきたりたり
おきなのなさけに此道を・たしかにをしへて
たひ給へと・せんしあれはおきなあはれにや
おもひけんさてはいたわしき御事なり是より
東上國へは三年三月に行つく道なり此間に
なんしよ・あまたあり此墅をは六やをんと申て
道もなくはてもなき所なり・こらうやかん
みち〳〵て人けんの・かよひならす又あんろくさん
と申山は天よりつるきふり地より火ゑん
もえあかりいつれも行事なしたんとくせん
と申は・しゆみにならふほとのたかき山なりその

58 ふもとに・こんか川と申は・ひろさふかさ一万
59 余旬なり・かやうのなん所をは・いかてかゆかせた
60 まふへき・しかれとも西上國のあるしにて
61 ましませは巻物をもちて頭を・まいらせへくて
62 はたの御まほりにかけさせたまは、・いかなるなん
63 しよなりともやす〳〵と御とほりあるへきとて
64 左のたもとよりこんていの巻物一くわん取出
65 太子に奉る太子うけ取せ給ひて御身にそ
66 かけさせ給ひけるさておきなは此道をゆかせ
67 給へとて御門の御てをひきまいらせ道ある
68 所に行せ給ふとおほしめせは・おきなは・いつくとも
69 なくうせにけりさて太子はおきなのをしへの［墨抹］
70 つる道のま、御幸なりける春はかすめる
71 山花ちるそらをうちなかめさせ給ひ秋は
72 さやけき月峯のもみちをうちなかめ〳〵
73 ゆかせ給ふほとに三年三月と申に東上國に
74 つかせ給ふはるかのたひなれは御かたちもお
75 とろへ御心はへも・つかれさせ給へはあるかたわらに
76 た、すみ給ふか・西上國の大内の御事をも・なつ
77 かしく・おほしめしいたされ御こしよりやう
78 ちやうを取出しし、丸さうふれんといふかくを
79 しはらく・あそはしける爰にはにふの小屋
80 より女房一人立出て太子にたつね申けるは
81 御身はいつくのいかなる人にてましますそいま
82 の御笛のかくは國の御門ならてはあそはさ
83 ぬかくをちやうもん申心をおとろかして
84 こそ候へと申太子きこしめされかゝるてんしや
85 の身としてかくをき、しる事は此國の大内へ
86 まいる物にてやあるらんとおほしめし是は
87 西上國のしゆきやうしやなるか御けしやうの
88 くそくを・もちたり・もし大内ひめみやさまに
89 あひらんならは・まいらせあけへきよしいつ
90 わりからこその給ひけれ彼女房も御ふへのかくを
91 承てた、ならぬ心得かやうの御事をも申
92 あけんとやおもひけん御けしやうのくそく
93 もちたまは、ひめみやへまいらせたまへとて
94 やかて太子の御そてを引て大内へこそまいり
95 けれ此おんなひめみやに申あくるやうこゝに
96 西上國のしゆきやうしやとてきたりけるか
97 御けしやうのくそくをもちたるよしを申
98 又旅宿のなくさみとてふへをふかせ給ふを
99 うけたまはりて候へはし、丸さうふれんのかく
100 すみやかにふかせ給ふさてはた、ならぬ御かたと
101 心得又御けしやうのくそくをもしは御
102 ゑひらんのためにこれまてくしてまいりて候
103 と申上あしゆくのみや此由をきこしめして

104 御むねうちさわき御かほにもみちをちら
105 させ給ひておほしめすやうさうふれんのかくは
106 つまこひのかくなり是は天下にしる人まれ
107 なるを修行者ふきけるふゑのねはたゝ人
108 にてはあるましくとおほしめし御ことはには
109 いたされす彼女におほせられけるは修行者
110 のけしやうのくそくあけ候へ御ゑいらんあるへき
111 よしおほせありけれは彼女太子へまいりけん
112 御けしやうのくそく上給へあしゆくの宮へま
113 いらせたきのよしを申太子なのめによろ
114 こはしくおほしめしかうはゐのたへし
115 雪のうすやうとりかさね一首の哥をそ
116 あそはしけり
117 花の香を風のたよりにき、しよりそ、ろにぬる、我か袂哉と
118 遠山かたにおした、み松かはやう引むすひわ
119 たさせ給へは彼女請取まいらせてやかてあしゆく
120 のみやへこそまいらせけるひめみや此たまつさ
121 をひらき御らんすれは御けしやうのくそくは
122 なしされはこそとおほしめしあわせられ
123 やかて御返哥ありける
124 我ゆへにくちなんそてのなみたこそ
125 とひとはれてのあとのきぬ〳〵
126 かやうにあそはされてこのたまつさの上をは
127 もとのことくつ、ませたまひて此女にたまわる
128 やかて太子にまいらせけれはひらき御らんして
129 夢かうつ、かとおほしめし御心の内の御よろ
130 こひたとへんかたそなかりけるやかて姫みや
131 よりこかうの御つほねをいたさせ給ひていま
132 のしゆきやうしやを此ゆふへはつほねにと、め
133 給へ御けしやうのくそくこまやかにめし
134 あけられへきよしおほせありけれは太子も
135 こかうのつほねまてそ御まいりありけるその
136 日もほとなく暮けれは太子も姫宮へまいら
137 せ給ふやかて・みたいもうちとけてひよくれん
138 りのかたらひもあさからさる御ちきりなりさる
139 ほとに天に口なし人のさへつりとてやかて
140 大王きこしめしつけられさても修行者
141 姫宮へまいる事あさましくおほしめし
142 やかて・しさ(裏)いにおこなわるへきとて
143 あらけなき物のふともにせんしを・くたさる、
144 さるほとにもの、ふせんしを承てやかて
145 ひめみやへみたれ入七重の屏風八重の
146 みす十重のきちやうををしやふりひめみや
147 をからめまいらせすてにかゐせんとする處に
148 上王ふにん・きこしめし・目のまへにて・うき
149 事をみんよりも・こらうやかんのすめる・たん

150 せんのほらへすてさせ給へとありけれは大王・とも
151 かくもとのせんしにまかせ・いまの修行者をも
152 からめとりて・ふにんの御こしひとつにのする
153 物のふとも御こしを中にさしあけいたわり
154 申事もなく・ゆくほとに七十五日の道なれとも
155 いそきはしるま、三十余日と申にたんせんの
156 ほとへそ・つけ給ふ御こしを中よりおろし
157 すてにかひしまいらせんとする處にひめみや
158 さもうつくしき御手を合られ物のふとも
159 のなさけに我等　二人のいのちをたすけ
160 よと・おほせありけれはさもあらけなき物
161 のふなれ共心よわり五十余人は一度に
162 こゑをあけてそ・なきにけりさて　から
163 こしをかき東上國へそ帰りけるさて太子
164 あしゆくふにんは御夢のさめられたること
165 くにてあきれてこのほらに一夜をあか
166 させ給ふいにしへはあやりやうらんのしとね
167 ひやうとらのかわをふませ給ひし御身
168 なれ共此岩屋（イワヤ）の内には木のはまれなるに
169 たかひにこしをかけられなみたならては御とき
170 になる事はなしかくてもあられぬ御身なれ
171 は太子はみねにのほらせ給ひつま木を
172 ひろわせ給ふふにんは谷にくたらせ給ひて
173 ねせりをつみとかく御いのちをたすかり給ふ
174 こそあはれなれ・されはこらうやかんもかなし
175 くやおもひけんあるひは木のみあるひはつま
176 木くち木をくわへ此いわやのほとりまてま
177 いりなみたをなかしひれふしたるあり
178 さまたとへんかたそなかりけるされ共（ヨ）うき
179 世（ヨ）の中の御なくさみにやふにんた、ならぬ
180 御心いてきさせ給ひて月日ほとなくつもり
181 すてに王子御たんしやうならせ給ふいにしへ
182 ならは大臣（シン）〔漢〕うんかく天上人百くわんけいしやう
183 にいたるまて此御事をよろこひあつかふへ
184 きにかたしけなくも太子御手をそへられい
185 たきあけまいらせらるれはたまをのへたるか
186 ことくなる王子にてまします・やかて御名（ナ）をは
187 善高太子（センカウタイ）とそ御申ありける・その年暮て
188 又あくる年のころ・くわいきたらせ給ひて
189 太子むまれさせ給ふ此御名をは善真（センシン）太子
190 とそ御つけありける・かくて二人の王子さま
191 ほとなく御せいしんありける太子御子（コ）さまを
192 つくくと御らんしてふ〔漢〕にんにむかひて・お
193 ほせありけるは子とも此ほらにてとにもかくにも
194 なさん事おろかなるへし我本國（ホンコク）へかへりて御
195 こし車（クルマ）をそうし・御むかひにまいらん・それまて

196 此いわやにてまたせ給へとおほせければふ
197 にんはなみたをおさへておほせけるは太子もろ
198 ともに此王子たちをあひしてあるさへすみ
199 うきにほん國にかへらせたまは、三年三月の
200 ゆきき七八年のおくるへしそれまてみつ
201 から一人・いて・まちつけまいらせん事かた
202 けれはた、此いわやにて我等もろともにとにも
203 かくにもならせ給へとと、め給ふ太子かさねて
204 おほせありけるはさうして生（しやう）を請（うくる）物そらを
205 かけるつはさ地をはしるけた物かうかの
206 うろくつまても子（コ）をおもふ道はまよふと見えて
207 候は此太子ともを世にたてすしていたつらに
208 なさん事おろかなり七八年の間もいくほとあらし
209 只是にてまたせ給へとしきりにおほせけれは
210 ふにんちからなくおほしけんさらはとてたち
211 わかれ出させ給ふたかいに・御をも・かけを見お
212 くり見かへり給ひてゆくもと［補人］まるも御なみた
213 よそのそてまてしほれけり太子いそかせ
214 給ふほとに二年三月と申に西上國につき
215 たまふ本の大裏へいらせ給ひてこ、かし
216 こを御らんすれ共人をともせすのきのひわたは
217 やふれおちつゐちおほゐひま見えて
218 只いにしへのかたちはかりこそのこりける

219 や、ありて老人一人出あひ御門（ミカト）を見たて
220 まつりてなみたをこほしける御門此大内の
221 あるしはなにとならせ給ふそとおほせければ
222 老人こたへて申やう大王は善正太子うせ
223 給ひし後ふにんもろともに御なけきよに
224 こへてふにんはあしたのつゆときえ給ふ大王
225 ひとかたならぬ御なけきに御世をすてられ
226 光林寺（クワウリンシ）と申山寺におこなひすまして
227 御座（サ）あるよしをくわしく申あくるそのとき
228 太子は我こそもとの大王の御子よ只今是へ
229 きたりたるよし光林寺へ申上へきよし
230 おほせられけれはおきなも我こそもとの
231 御て、にまいりたる物にて候へとよろこひいそき
232 光林寺へそうもん申大王も世にふしきに
233 おほしめしやかて大内へうつらせ給ふそのま、
234 太子に御そゐあつて天下のよろこひ是
235 には過しとそきこえける是につゐて大王
236 あさうきふにんの御事をおほしめし出され
237 よろこひの中のなけき是なりさるほとにむ
238 ちやうねんわうはたんせんのほらにおはします
239 ふにん太子さまの御むかひのために御こし
240 くるまのかさりさま〳〵なりされは大臣（シン）くわん
241 にんまて御むかひのよういとそきこえける又

242 たんせんのほらのふにんきみの御事をあけ
243 くれおほしめし此ま、年月ををくらん事
244 まちとをなるへしとて太子さまとつれまいらせ
245 られち、の御あとをたつねはやとおほしめし
246 すてに出させ給ひしか一しゅ(渭)のかけ一かのなかれ
247 をくむ事もたしやうのゑんときけはすみ
248 うかりつる岩屋も心あるらんとおほしめし
249 一首はかくそあそはしける
250 すて、行岩屋なりとも人とはは
251 たえすこたへよみねの松風　と
252 うちゑひし給ひていとけなき御子さま
253 をあとさきにともなひ給ひていと物ほそき
254 御足にわらくつをさしかけさせたまひて千
255 里万里にをもむき給ふ事うき世の中
256 のあはれなりそのま、山をこへ谷をくたり
257 里に出れはのさわをわたらせ給ひて人の
258 すみかへ立よらせ給ひてそてこゐをめ
259 さるれとも人のなさけのうすけれは御く(渭)こ(渭)事
260 たゝせ給ふ事もなくとかく日を暮しゅ
261 かせ給ふほとに六やをんとやらん申はらへ
262 まよひ出させ給ふ此原は人けんのかよふ事
263 まれなれはたゝけた物か道ならては見えす
264 此原をたよりにてたとりゆかせ給ひけるか
265 ならわせたまわぬたひなれは御心もつかれ
266 させ給ひて風のこゝち出き給ひてくさ木の
267 ねをまくらにしふし給ふ太子おほせありけるは
268 此墅はこらうやかんのすむ所なれは一足もゆ
269 かせ給へかしといさめ給へはやう〳〵御まくらを
270 あけられたとらせ給ふほとに六やをんの
271 墅中なるしやくせんたんの木の本へつかせ
272 給ふ・その夜は木のねをまくらとして
273 二人の御子さまをまへうしろにいたわり
274 給ひて・物すこくもあかさせ給ひけるこそ
275 あはれなれさて其日も風の御こゝちおも
276 りけれは善高太子は人里に出給ひて
277 ときれうけて御いのちをのへさせ給ふ
278 つきの日は善真太子ときれうこいに
279 出させ給ふこそまことにあらぬ御さまなれさて
280 ふにんは御心もよわりきわまらせ給ひ
281 て二人の御子さまの御手をとりて御むねに
282 をしあてられ今生のなこり是までなり
283 我きへての後西上國へたつねあたりち、
284 きみにあひたてまつり此よしをくわしく
285 かたりまいらせへしあさからさりし御ち
286 きりの中なれはとてしさゐの御哥
287 なくなみたつゆときえなん此原の

くさのかけまてきみを見ましやと
あそはされもあへすあしたのつゆとそきへた
まふさて二人の御子さま御は、のさうの御手に
すかりつき給ひて我等いとけなき物ともを
すて給ひていつくにゆかせ給ふそとこゑ
もをしますなき給ひて御しかいにいたき
つき二三日はそのま、にておはしけるかや、ありて
善高太子善真太子にむかひておほせあり
けるはさても此ま、此墅にてはてん身なら
ねはいさやち、のゆくゑをたつねまいらせん
とては、のしかいにはくさひきかけまいらせ
て心ほそくも只二人御あとを見かへり〳〵ゆか
せ給ふ御事こそ世にこえたる御かなしみ
なれみねにあからせ給ひ谷にくたらせ給ふ
とてもち、戀しやは、戀しやと御こゑ
もをしまれすさけひ給へはあまひこのこ
たふるを人のあるかとうちたのみあくかれ
行せ給ひけるこそあはれなれさて西上國
には御むかひの御こしくるまかさりと、のへて
御門めされ大内をうち出させ給へは近國の人〻
もみな御とも申さんとしける御門と、め
させ給へはいまの御とものかす三千余人
とそきこえける御こしくるまをとはせいそ

かせ給ひけるほとに六やをんちかくなりぬれは
もの、ふとも百人はかり御さきはしりにそ
行けるさるほとに太子二人は此山の口まて
まよひ出させ給ひしか御こしくるまのをと
人のこゑ〳〵けしからすたかけれはにわかに
おとろかせ給ひてとあるこかけにしのはせ
給ふ御すかたを物のふとも見つけまいらせ
此あたりは人間のかやう事まれなりこらう
やかん又は天魔はしゆんか御門の御なりを
さまたけんためにたはかりけるかとてすてに
かいせんとしけれは太子こへをあけておほせ
けるは是は東上國の物なるか西上國へち、を
たつねてまよひ行なりいのちをたすけ
よとさけはせ給ふこゑを御門きこしめし
つけられあやしくおほしけんくわん人を
ちかつけいまの物のふともなやますしゆ
きやうしやを御こしちかくまいらせよとせん
しありけれはくわん人やかて御子さまを御
こしちかくまいらせけるやかて御門太子さまに
むかひておほせけるはなんちはいつくのいかなる物
いつくへ行そと御たつねありけれは善高太子
かしこく申ありけるは是は東上國あしゆく
ふにんの御子なるか西上國の善正太子ち、

334 にてましませは御あとをしたひてまよひ
335 きたりたりとおほせけれは大王ころひお
336 ちさせ給ひて二人の太子をさうの御ひさに
337 かきのせ給ひて我こそち、の善正太子にて
338 あれさては、のふにんはと・とわせたまへはたん
339 せんのほらをはは、もろともに立出て西上
340 國をたつねておはせしか千里万里の道
341 なれはしたひ〳〵に御心もつかれさせ給ひ
342 て六やをんとやらん申墅中しやくせんたん
343 の木の本にてきへうせ給ひぬそのときお
344 ほせけるは我等はち、きみにあひまいらせはふにん
345 きみに今生（コンシヤウ）にていま一度見候へまいらせて
346 のちとにもかくにもならはやとおもふま、生
347 死無常（シムシヤウ）のならひ・かいなけれはこ、にてむな
348 しくなるなり来世（ライセ）にてはかならすおなし
349 はちすのゑんとなりまいらせんおもひわすれ
350 たまわすはあとをとゐてたひ給へと　し
351 せいよみ給ひしをさいこにてそのま、きへ
352 させ給ひけるとこま〳〵と御物かたりあり
353 けれはきみをはしめたてまつり御ともの人〻
354 けし以下にいたるまて一度にわつとこゑを
355 あけなけかせ給ふ御ありさまを見る人きく
356 人あはれもよほさぬ人はなかりけりかくて

357 太子二人を御こしにのせまいらせ給ひて
358 六やをんしやくせんたんの木の本へたつね
359 つかせ給ひてふにんの御しかいはさためてとら
360 おほかめもひきちらすたん（ら）とおほしめすに
361 けた物も物あはれをしりけるかこらう
362 やかんのたくひしやくせんたんのあたりに
363 なみゐて御しかいをしゆこしけるおもむき
364 見えて・ゐけるか・御なこりをしけに見かへり
365 くさ木のおくへそ・しのひける御門御しかいを
366 御らんすれは花のやうなる御すかたもかわり
367 はて御まなこねふらせ給ふことくなりける
368 をひきかけたまひしくさはを取のけ御
369 門御しかいに・いたきつかせ給ひて・御なけき
370 中〳〵とかくにおよはさる・ふせいなりや、
371 あつてあたりにたつとき御ひしりを・しやうし
372 まいらせしやくせんたんの木のえたにて御しかい
373 を・ゆふへのけふりとなしまいらせ給ふ・なかはに
374 天よりしうんたなひきをんかくきこへ来て
375 さうの・てんたう・はたをさし・廿五のほさつ
376 たちはこゑ〳〵に・きよくをなしまいくたり
377 ふにんの御しかいを・けふりの内より・すくわせ
378 給ひて天にあからせ給ふ御かたち・たちまち
379 ひかりさし佛躰（フツタイ）にならせ給ふ御まなこは

380 秋の月のわのことし御くちひるははちすの
381 かたふき・むねは八やうのれんけ・ひらけさ
382 うの御手のゆひは十羅刹女とけんし
383 二の御あし文殊普賢とあらわれさせ
384 給ひてそのま、天にあからせ給ひける
385 御ありさまをきみ御らんしてこれまてと
386 おほしめしわれもほとけをねんしおなし
387 はちすに・むまるへしと・おほしめし
388 た、れ・そのとき御ともの大臣以下にいたる
389 まて・おの〳〵本國へかへり大王に此よし
390 可申・我はみやこに・かへりても・よしなけれは
391 修行の道におほしめしたらんとて御くし
392 のもとゆひはらわせ給へは御ともの人〻
393 このま、修行の道に御とも申さんと
394 きみしきりに本國へかへれと・おほせあり
395 けれは・ちからなく本國へかへる人もあり・其
396 ま、もとゆひをはらひて修行に出る
397 人もあり心〳〵の身あつかい・世にたくひな
398 きありさまなりさて君はたつとき・ひ
399 しりにあわせ給ひて御くしそりをとさせ
400 給ひてはなのたもとをすみにそめ御名
401 をは法蔵比丘とそ申けるさても三界
402 の衆生の・わかれも我か・ことくにそ・おもふ
403 らんとそおほしめし六十願を・おこし
404 衆生さいとのためにこかうしゆあつて
405 長世のひくわんをとけ阿弥陀佛とならせ
406 給ふ二人の太子は観音勢至とならせ給ふ
407 あしゆくふにんは衆生の四百四病のや
408 まふをちして衆病疾除身心安楽の
409 願をたて給ひて東方浄瑠璃世界を
410 くすりのつほとも、たせまふらせ給ふこの
411 ために阿弥陀の六十願を十二願わけて
412 薬師如来にまいらせ給ふ阿弥陀は西方に
413 とひうつらせ給ひてさとりをもまよひをも
414 もらさす安樂世界へむかひとらせ給ふ事
415 まことにありかたき御事現世安穏
416 後生善處のひくわんなれはきやう(漢)ちう(漢)
417 さ(漢)くわ(漢)よく〳〵弥陀をねんせ(漢)させたまは、(漢)
418 誰も御折言あるへきなり
419 天文七年卯月五日書之
420 不審之事雖多任本に
421 書写之訖愚筆比興〻〻

（代表　佐々木　勇・広島大学教授）